

# 「音学シンポジウム2016」開催にあたって

北原 鉄朗<sup>1</sup> 齋藤 大輔<sup>2</sup> 森勢 将雅<sup>3</sup> 深山 覚<sup>4</sup> 糸山 克寿<sup>5</sup> 滝口 哲也<sup>6</sup> 饗庭 絵里子<sup>7</sup>  
堀内 俊治<sup>8</sup> 寺島 裕貴<sup>9</sup> 亀岡 弘和<sup>9,2</sup> 大石 康智<sup>10</sup> 程島 奈緒<sup>11</sup> 向井 智彦<sup>11</sup> 小幡 哲史<sup>7</sup>

概要：本稿では、「音学シンポジウム2013」「音学シンポジウム2014」「音学シンポジウム2015」の成功を受けて実施する「音学シンポジウム2016」について、その実施の趣旨などを述べる。

## 1. はじめに

「音学シンポジウム」は、音に関するあらゆる学術分野をターゲットに、シングルトラックによる招待講演とポスター形式による一般発表を繰り広げる学術イベントである。2013年5月にこのシンポジウムを初めて実施し、今年で4回目の開催となる。本稿では、「音学シンポジウム」の企画動機や趣旨を簡単に振り返るとともに、今年のコンセプトについて述べる。

## 2. これまでの「音学シンポジウム」

「音学シンポジウム」シリーズの第1回「音学シンポジウム2013」は、情報処理学会音楽情報科学研究会(SIGMUS)20周年記念企画の1つとして企画され、2013年5月11~12日にお茶の水女子大学で実施された。画像処理分野で最も規模が大きなシンポジウムである「画像の認識・理解シンポジウム(Meeting on Image Recognition & Understanding; MIRU)」に感銘を受けた亀岡が、音の分野でもこのようなシンポジウムを開催すべきであると強く思い、これをSIGMUS20周年記念の最初のイベントに位置付けて実現に至ったものである[1]。

- 音に関するあらゆる分野を対象
- シングルトラック進行

という基本コンセプトの下、12件の招待講演が企画され、一般発表はすべてポスターセッションにて行うことになっ

た。積極的な広報活動の甲斐があり、54件のポスター発表が集まり、約350名もの方々が参加し、大盛況であった。第2回の「音学シンポジウム2014」は2014年5月24~25日に日本大学文理学部キャンパスにて、第3回は「音学シンポジウム2015」は2015年5月23~24日に電気通信大学にて行われた。いずれも第1回と同様に、12件の招待講演とポスターセッションによる一般発表の形式で行われた。いずれも60件程度のポスター発表、250名前後の参加者があり、盛況のうちに終わった\*1。

## 3. 今年の「音学シンポジウム」

今年の「音学シンポジウム2016」は5月21~22日に東海大学高輪キャンパスにて行われる。「音学シンポジウム2014」「音学シンポジウム2015」では、SIGMUSの外部の人の意見を運営に取り入れるため、実行委員会を立ち上げ、協賛研究会(電子情報通信学会/日本音響学会 音声研究会(SP)、電子情報通信学会 応用音響研究会/日本音響学会 電気音響研究会(EA)、日本音響学会 聴覚研究会(H))から1~2人ずつ実行委員会に参加してもらっていた。今回は、組織をプログラム委員会と現地事務局に分け、表1に示す体制で実施することとなった。

「音学シンポジウム2016」では、全体テーマとして

- 音を操る人間を知る
- 音を使って人間を魅了する
- 音を使って人間の生活を支援する

の3つを掲げ、次の方々に招待講演をお願いすることとなった(五十音順)。

- 伊勢 史郎氏(東京電機大学)
- 駒谷 和範氏(大阪大学)
- 嵯峨山 茂樹氏(明治大学)
- 高橋 宏知氏(東京大学)

<sup>1</sup> 日本大学  
<sup>2</sup> 東京大学  
<sup>3</sup> 山梨大学  
<sup>4</sup> 産業技術総合研究所  
<sup>5</sup> 京都大学  
<sup>6</sup> 神戸大学  
<sup>7</sup> 電気通信大学  
<sup>8</sup> KDDI 研究所  
<sup>9</sup> NTT コミュニケーション科学基礎研究所(CS研)  
<sup>10</sup> NTT データ  
<sup>11</sup> 東海大学

\*1 これまでの「音学シンポジウム」の詳細については[2]を参照していただきたい。

表 1 「音学シンポジウム 2016」プログラム委員会および現地事務局  
(a) プログラム委員会

|              |       |                 |
|--------------|-------|-----------------|
| 委員長          | 北原 鉄朗 | 日本大学            |
| 副委員長         | 齋藤 大輔 | 東京大学            |
| 副委員長         | 森勢 将雅 | 山梨大学            |
| 委員 (ポスター)    | 深山 覚  | 産総研             |
| 委員 (音楽)      | 糸山 克寿 | 京都大学            |
| 委員 (音声)      | 滝口 哲也 | 神戸大学            |
| 委員 (聴覚)      | 響庭絵里子 | 電気通信大学          |
| 委員 (電気音響)    | 堀内 俊治 | KDDI 研究所        |
| 委員 (学際分野)    | 寺島 裕貴 | NTT CS 研        |
| 委員 (MIRU 連携) | 亀岡 弘和 | NTT CS 研 / 東京大学 |
| 委員 (アドバイザー)  | 大石 康智 | NTT データ         |

(b) 現地事務局

|      |       |        |
|------|-------|--------|
| 事務局長 | 程島 奈緒 | 東海大学   |
| 事務局員 | 向井 智彦 | 東海大学   |
| 事務局員 | 小幡 哲史 | 電気通信大学 |

- 武田 一哉氏 (名古屋大学)
- 牧 勝弘氏 (愛知淑徳大学)

いずれの方もこの全体テーマにぴったりで大変興味深い研究成果をお持ちの方なので、今から大変楽しみである。

今年のシンポジウムでは、2つの新しい試みを行うこととなった。その1つが「MIRU 連携オーガナイズドセッション (OS)」である。MIRU が本シンポジウムのきっかけになったことは前述の通りであるが、その「本家」の MIRU との連携企画である。

- 信号処理と逆問題
- 認識と変換
- 応用とインタフェース

の3つのトピックについて、音学シンポジウム側の研究者 (音の研究者) と MIRU 側の研究者 (画像の研究者) とがトークバトルするような形になる見込みである。音学シンポジウムからは、「信号処理と逆問題」についてはシンポジウムのプログラム委員でもある亀岡弘和が、「認識と応用」については昨年のシンポジウムの副実行委員長だった戸田智基 (名古屋大学) が、「応用とインタフェース」については SIGMUS の運営委員でもある中野倫靖 (産業技術総合研究所) が登壇する。MIRU からは、「信号処理と逆問題」については向川康博氏 (NAIST)、「認識と応用」については藤吉弘巨氏 (中部大学)、「応用とインタフェース」については岩井大輔氏 (大阪大学) にご登壇いただく予定である。8月1~4日に浜松で行われる MIRU 2016 でもこれに連動する企画が行われると聞いているので、こちらも含わせてご期待いただきたい。

もう1つの新たな試みが、チュートリアルの実施である。このシンポジウムは、音の様々な分野間における異分野交流を促進することを主な目的としているが、講演の経験が豊富な方々に招待講演をお願いしているとはいえ、限られた時間で、その分野の人にとっても分野外の人にとっても

ちょうどいい粒度で講演をするのは必ずしも簡単ではない。そこで、招待講演とは別に、音に関する各分野の基礎的な知識を15分でわかりやすく伝えるチュートリアルを企画した。招待講演と1対1にし、各招待講演を聴くのに必要と思われる知識に限定して、招待講演者の元教え子など比較的關係の近い研究者にチュートリアルを担当してもらうことになった。チュートリアルがご自身の専門を広げるきっかけになれば、企画者としてこれ以上の喜びはない。

#### 4. おわりに

今年の「音学シンポジウム」は、これまでの「12件の招待講演 + ポスターセッション」という形式にとられることなく、新たな形式にチャレンジした。このような形式の変更が参加者にとってどう映るか、我々も大変気にしている部分である。これからも、参加者各位とともに積み重ねた経験を活かし、よりよいシンポジウムを目指して少しずつ変化を加えていきたいと考えている。ぜひ忌憚のないご意見をいただければ幸いである。

#### 参考文献

- [1] 亀岡 弘和 他:「音学シンポジウム 2014」開催にあたって、情処研報, 2014-MUS-103-1 / 信学技報, IEICE-SP2014-1, May 2014.
- [2] 北原 鉄朗 他:「音学シンポジウム 2015」開催にあたって、情処研報, 2015-MUS-107-1, May 2015.